Society of

Elementary

Education and

Curriculum

初等教育カリキュラム学会

第 10 回大会

発表要旨集録

2026 年 1 月 11 日（日）　於：広島大学

初等教育カリキュラム学会

口頭発表①　L102

9:30～10:00

SOSEI 学における「ミッション型地域探究学」の開発・実践と分析

松林泰弘（広島大学附属三原小学校）
神野幸隆（国士舘大学）

福山市立想青学園の新教科「SOSEI 学」を対象に、「ミッション型地域探究学」の開発と実践をまとめた。「ミッション型地域探究学」とは、地域の方からのミッション（外発的動機）を起点とし、地域の課題解決を図る中で児童生徒が様々な地域の人と出会い、共に地域を探究・創生することを目指した学習である。その立ち上げ期を、児童生徒・保護者・地域・教員アンケート、教員インタビューから分析し明らかにした。

キーワード： 総合的な学習の時間　地域探究　外発的動機　社会に開かれた教育課程

10:00～10:30

社会に開かれた教育課程に基づく SOSEI 学カリキュラムの変容と要因

神野幸隆（国士舘大学）
松林泰弘（広島大学附属三原小学校）

社会に開かれた教育課程の理念のもと「SOSEI 学」を対象に、地域探究カリキュラムが 3 年間で如何に変容するかを分析した。公共性・協働性・主体性を視点に、社会関係資本（結束・橋渡し・連結）のネットワーク論を基に、観察・インタビューで変容点と理由を明らかにする。具体的には公共課題数や連携団体数等の指標とともに、ミッション型から協働への転換要因を示し、地域探究学のカリキュラムの変容要因を明らかにする。

キーワード： 総合的な学習の時間、社会に開かれた教育課程、地域探究、カリキュラム改善

10:30～11:00

これからのデジタル教科書～指導者用と学習者用の連携～

岡本龍治（株式会社　帝国書院）

令和 6 年度の小学校教科書改訂を機に、教師用指導書と指導者用デジタル教科書をセットにする教科書会社が増え、指導者用デジタル教科書の導入率が上昇した。次の段階として、現在小学校第 5 学年～中学校第 3 学年の外国語（英語）と算数・数学（全児童・生徒の 55%）で導入されている学習者用デジタル教科書に加え、その他の教科での導入も予想される。その際重要となる「指導者用と学習者用の相互連携」について本研究で発表する。

キーワード： 指導者用デジタル教科書、学習者用デジタル教科書、相互連携

11:00～11:30

社会科における合意形成学習の変遷と革新　－初等教育への援用可能性に関する検討を通して－

西畑郁希（広島大学大学院博士課程後期）

本研究は、社会科における合意形成学習の課題を明らかにし、初等教育への援用を意識した新たな合意形成学習のあり方について、考察することを目的としている。まず、吉村功太郎氏と水山光春氏が提唱する合意形成学習の特質と残された課題を明らかにする。次に、各社会諸科学で定義される合意形成についての基礎研究をもとに、初等教育への援用可能性に関する検討を進める。

キーワード：初等社会科、社会科合意形成学習、合意形成学、公共政策学、交渉学

11:30～12:00

学校独自の地域学習をいかに継承・発展させていくことができるか？
―加東市立滝野東小学校の加古川舟運学習を事例として―

吉川修史（兵庫教育大学）

社会科副読本においては、単元ごとに市区町村や都道府県に関わる１つの事例が取り上げられ内容が構成されている。しかし、市区町村の中にも様々な地域があり、学校が立地する場所に応じて異なる学習内容が展開されている場合がある。本研究では、加東市立滝野東小学校の加古川舟運学習を事例として、学校独自の地域学習を継承・発展させていくことに寄与する、デジタル学習材及び評価問題を開発することを目的とする。

キーワード：小学校社会科、地域学習、学校独自、デジタル学習材・評価問題、加古川舟運

口頭発表② L104

9:30～10:00

英才教育実践から見る「才能教育」の課題と可能性 ― 聖徳学園小学校を一事例として ―

河上裕太（聖徳学園小学校）

「特定分野に特異な才能のある児童生徒」への指導・支援の枠組みとして、「才能教育」の定義や方法が整備されつつある。他方で「才能教育」は、才能ある児童を一般の児童から切り離して語る傾向をもつ。本研究は、1969 年から英才教育を標榜してきた東京都の私立小学校である聖徳学園小学校の実践および研究史を掘り起こし、「才能教育」の在り方を問い直し、小学校教育の在り方へと接続して検討することを目的とする。

キーワード：英才教育・才能教育・ギフテッド・臨床・創造性

10:00～10:30

学校生活へのよりよい適応を支援する道徳教育プログラムの開発（2） ― Program Based Approach by Optimal Design（PBAOD）による小学校４年生の夏休み明けの実践をもとに ―

森川敦子（比治山大学）
高橋均（広島大学）

本研究の目的は、論者らが開発した Program Based Approach by Optimal Design（PBAOD）に基づき、学校生活へのよりよい適応を支援する小学校 4 年生の 9 月用の道徳教育プログラムを開発することである。そのため、ソーシャルスキルトレーニングと道徳科、学級会を組み合わせる 7 時間の道徳教育プログラムを２種類作成し、学校適応感、規範意識及び自己肯定感の面から効果を検討する。

キーワード：道徳教育、プログラム開発、学校適応感、規範意識、自己肯定感

10:30～11:00

学齢期の自閉症児の親のストレスに関する研究 ―心理尺度の開発と実態把握―

酒井和香（広島大学大学院博士課程後期）
村上理絵（広島大学）

学齢期の自閉症児の親のストレス尺度の開発と実態把握を目的に質問紙調査を実施した結果、「学校との共通理解形成が難しいこと」等の 4 因子からなる尺度を作成した。自閉症症状が重い児の親は軽い児の親より児の学校生活等へのストレスが高かった。自閉症が軽い児の親は、重度・中度の児の親より周囲の理解等へのストレスが低かった。特別支援学校に通う児の親は、通常校に通う児の親より学校と親の関係等へのストレスが低かった。

キーワード：自閉症、親、ストレス、心理尺度

11:00～11:30

協働的な音楽づくり活動の実践報告：WebSocket を用いた ICT 教材による

長山弘（盛岡大学）

発表者はこれまでに、音楽づくり活動のための Web アプリケーションを開発し、授業実践を通して教材の教育的意義を検討してきた。教材開発の主要な概念の 1 つがティンカリングである。長山（2023）で報告した教材は個人によるティンカリングを前提としていたが、今回は WebSocket を用いた双方向通信により、複数人での音楽づくり活動を可能にした。本発表は、その機能を用いた授業実践の結果から、教材の意義を検討する。

キーワード：音楽づくり活動、ICT、教材開発、ティンカリング、双方向通信

11:30～12:00

子どもたちはどのように身近な環境を探究するのか―5 歳児クラスの ICT 活用事例を中心に―

渡邉真帆（福山市立大学）
李睿苗（広島大学大学院博士課程後期）
大道香織（広島大学大学院博士課程後期）
田島美帆（広島大学大学院博士課程後期）
岸本有紀子（広島大学大学院博士課程後期）
石川徹（広島大学大学院博士課程後期・高崎健康福祉大学）
清水憲志（広島大学大学院博士課程後期・中国短期大学）
玉城美千子（広島大学大学院博士課程後期・あおぞら幼稚園）
周偉傑（広島大学大学院博士課程後期）
ニフュユス美冬（スマートエデュケーション）
下川功喜（スマートエデュケーション）
宮島衣瑛（広島大学）
中坪史典（広島大学）

本研究の目的は、保育施設の 5 歳児クラスにおいて、子どもたちがどのように身近な環境を探究するのかを明らかにすることである。私立 X 認定こども園 5 歳児クラスで取り組まれる探究活動に着目し、保育者へのインタビューデータや園 Web サイトで公開される写真付き記録を質的に分析した。結果、5 歳児がタブレットや持ち運び可能な電子顕微鏡等の ICT を用いながら季節の自然や身近な素材を観察し、友だちと共有する姿が明らかになった。

キーワード： 5 歳児・環境・探究・ICT・質的研究

口頭発表③　L107

11:00～11:30

小学校における個人探究の手立てに関する実践的研究
―3 年生の「疑問・仮説・検証」段階を通した探究的学びの支援―

片山崚河（開智所沢小学校）

本研究は、小学校 3 年生を対象に、個人探究の導入段階である「疑問」「仮説」「検証」の実践を行い、児童の主体性・科学的思考力・メタ認知を育成する手立てを検討した。ロイロノート等 ICT を活用した思考の可視化と協働的省察が学びの質を高める一方、問いや仮説の科学的妥当性や検証方法の多様化には課題が残された。

キーワード：個人探究、探究的な学び、ICT 活用、メタ認知、小学校教育

11:30～12:00

ケアリングモデルを導入した小学校家庭科の「ソーイングはじめの一歩」
―ペア交流を通した動機づけと技能向上の検討―

藤井志保（山口大学）
松村梨奈（広島大学附属三原小学校）
伊藤優（広島大学）

本研究は、小学校家庭科における初めてのソーイングにおいて、年下のペア児童へのプレゼント製作を取り入れることで、教師が教え込まずとも児童が自ら学ぶ可能性を検討した。児童はまず自作品を使用し課題を実感した上で、ペア児童のために作品を製作した。意識調査および自由記述の量的・質的分析の結果、できないところからできるようになる技能の向上が見られた一方で、難しさの意識が残り、プレゼント作品に対しては達成感よりも「もっとよくしたい」という改善志向が示された。本報告では、その背景と学習意義を考察する。

キーワード：家庭科、手縫い、ケアリング、ペア交流、課題認識

口頭発表④　L202

9:30～10:00

学習者の切実性と技能性の向上を両立した話し合い単元の開発

山中勇夫（広島大学附属小学校）
羽島彩加（広島大学附属小学校）
中田江美（広島大学附属小学校）

話し合いの技能は、実際の話し合い活動を通して学習者に意識化される。だがその議題が学習者にとってあまりに切実である場合、学習者は活動を客観的に振り返りにくく、技能の活用や習得が困難になる。一方で、切実さを欠く議題では、話し合いが形骸化し学びの意義が弱まる。このような切実性のジレンマを克服する学習単元を開発し、その実践と考察を明らかにすることを本研究の目的とする。

キーワード：話し合いの技能　意識化　切実性　学習単元の開発　実践と考察

10:00～10:30

単一教材を用いた国語科授業研究にみる現場教師の「囚われ」
―A 市立小学校の教員研修に対する分析と考察―

阿部慶子（福山市立蔵王小学校）
森美智代（福山市立大学）
倉盛美穂子（目白大学）
光本弥生（広島修道大学）

本研究は、実践を通して学び合う教師の集団づくりを目標に、単一教材を用いた授業研究を行い、そこから現場教師の「囚われ」を明らかにするものである。対象は全学年単学級の A 市立小学校の教員研修である。

研修では、「号外」（草野心平）を国語科の詩教材として、全学年それぞれで授業を構想し実施した。授業後に教員向けと子ども向けにアンケートを実施し、前者には研修についての意識を、後者には物語への移入度を調査した。

キーワード：教員研修、単一教材、授業研究、同僚性、教師の囚われ

10:30〜11:00

小学校体育科授業における「他者」をきっかけとしたリフレクションについての実践的研究
－「メンター」や児童との関わりをもとにして－

中村　向陽（広島大学大学院教職開発専攻）

本研究の目的は、教職大学院の「学校における実習」で実践された小学４年生「ハンドボール」の授業を、「メンター」や「児童」といった「他者」との関わりについて記述された「フィールドノーツ」をもとにして、授業実践とその振り返りの過程において、学部卒院生の「リフレクション」はどのように起こるのかについて事例的に明らかにすることである。成果等については、当日に報告する。

キーワード：リフレクション、他者、フィールドノーツ、アクション・リサーチ

11:00〜11:30

若手小学校数学教師の気づきと実践との「不整合」を分析する概念的枠組みの構築

村上　良太（広島大学大学院博士課程後期、比治山大学）

本研究では、数学教師の気づきと実際の指導の質との間にある「不整合」に注目する。特に、若手教師においては、このような「不整合」が顕著に現れる可能性が考えられる。本稿では、これまで多くの数学教師の気づき研究で援用されてきた「PID モデル」をもとに、若手小学校数学教師の気づきと実践との「不整合」を分析する新たな概念的枠組みを構築し、事例分析を通して、その有効性を検証することを目的とする。

キーワード：数学教師の気づき、若手教師、不整合

11:30〜12:00

算数科学習における絵本教材の価値について　〜かけ算九九絵本の分析を通して〜

長谷川光未（福山市立御野小学校）
黒川麻実（愛知県立大学）

本研究は、算数科の学習において、児童の知識・技能の向上や学習意欲の促進に資する教材として絵本に焦点を当てたものである。算数的な内容を取り扱った絵本は数多くあるが、今回は「かけ算九九学習」に対象を絞り、現在出版されている九九に関する絵本の分析を行った。それぞれの絵本に期待される効果や授業での有用性について検討し、教材として求められる算数絵本の条件について考察する。

キーワード：教材研究、絵本、九九、乗法

【シンポジウム】

テーマ：初等教育の未来を支える教員養成・教員研修・条件整備

−教職課程の見直しに向き合う−

１．日　時　２０２６年1月１１日（日）13:30〜15:45

２．会　場　広島県東広島市鏡山１‐１‐１　広島大学教育学部 L205

３．趣　旨

改革・改善が進まない教員の働き方や条件整備。教員不足の進行。教育の理念、内容、方法などの急激な変化。教員研修の必要性。少子化による学校の規模縮小や再編。実効性の低い施策や施策間の不整合。

こうした状況がさらに数年続けば、初等教育は機能不全となり修復困難となるであろう。一人一人に適切な初等教育を実施できなくなれば社会の存立そのものが危うくなる。

今回のシンポジウムでは、書籍の第三部で検討した諸論点から、教員養成、教員研修、条件整備に焦点をあて、それぞれの観点から課題と展望を示す。あわせて、それらのつながりや関係性を検討して、子どもたちや教員、保護者、社会の希望となるような本質的な教育改革の道筋、ストーリーを模索したい。

４．登壇者など

（シンポジスト）

木原　成一郎（広島大学名誉教授）

久保　研二（広島大学）

山田　深雪（玉川大学）

（コーディネーター）

米沢　崇（広島大学）

The Society of Elementary Education and Curriculum

初等教育カリキュラム学会　第10回研究大会

発表要旨集録

発行日　　：2026年1月11日（日）
発行・印刷：初等教育カリキュラム学会
〒739-8524　広島県東広島市鏡山1-1-1
広島大学教育学部　気付